

## 美的判断の客観性と評価的知覚

源河 亨 (GENKA Tohru)

慶應義塾大学

---

本発表の目的は、美的判断の客観性に関する論争を整理し、それを踏まえて美的判断の客観主義を擁護する方針を提示することである。それは、「評価的な知覚経験」が美的判断の客観性を与えるというものだ。

美的判断の客観主義は、「これは優美だ」といった美的判断（美的性質の帰属）は、何らかの基準に基づいて正誤を問えるような客観性をもつと主張する。この立場で問題となるのは、美的判断に（文化や趣味の相対性に基づく）解消不可能な不一致が生じる可能性がある。たとえば、同じ対象に対する二人の美的判断が食い違っており、さらに、どちらの判断が正しいかを決めるのが難しいとする。すると、どちらの美的判断も正しくも誤ってもないと考えられるかもしれない。つまり、美的判断は主観的な選好や評価に過ぎず、正誤を問えるような客観性をもたないと考えられるのである。

客観主義を擁護するレヴィンソンは、こうした不一致を扱うために、美的判断が基づく美的経験を知覚的な記述的側面と評価的側面に分けるという戦略をとる(Levinson 2001)。記述的側面は対象がもつ美的性質に向けられたものであり、対象の美的性質を捉えられればそれは正しく、捉え損なえば誤っていると考えられている。他方で、評価的側面はその美的性質に対する個人的な評価であり、こちらは正誤を問えるようなものではない。こうした区別を用いると、美的判断が異なっている二人の主体の美的経験は、記述的側面は同じだが評価的側面に違いがあり、そのため全体としての美的経験が異なるため最終的な美的判断が異なると説明できる。それと同時に、記述的側面に基づいた美的判断は、正誤を問える客観性をもつと主張することができるのである。

こうした立場に向けられる懸念は、記述的側面が捉えている性質は本当に美的なものなのか、ということである(Bender 2001)。つまり、美的経験から評価的側面を取り除いて残る経験の側面は、色や形といった非美的性質に関わるものでしかないと考えられるのである。こうした非美的な記述的側面に正誤が問えることは確かだが、それを強調しても、美

的なものに関する判断の正誤の基準を与えることにはならないだろう。

以上の懸念を踏まえて、本発表では、客観主義を擁護する別の方針を提示したい。その方針とは、美的経験を知覚的な記述的側面と評価的側面に分離させるのではなく、「評価的な知覚経験」があり、それが美的判断に客観性を与えるというものである。知覚経験は、色や形といった価値や評価に中立的な性質だけを捉えるのではなく、そうした性質を主体に価値あるものとして表象すると考えるのである。なおかつ、そうした評価的な知覚経験は、非美的性質に向けられた知覚経験と同じく正誤を問えるものであり、それに基づいて美的判断は客観性をもつと主張する。美的経験を知覚と評価の複合体として理解する方針は、客観主義の論争とは独立にすでにいくつか提案されているが（たとえば、美的経験を概念主義的な「理由の空間」での価値づけとして説明する Iseminger 2006 や、非概念的だが評価的な情動と知覚の統合を主張する Prinz 2014）、本発表ではそうした考えと美的判断の客観性に関する論争との接続を試みる。また、美的判断の不一致の可能性を扱うために、主体の背景的な認知状態の違いが知覚経験に違いをもたらすという「認知的侵入可能性」を取り上げる。それによって、美的判断の食い違いは、背景的な評価の違いによって知覚経験に違いが出るために生じると説明できるようになる。

Bender, J. (2001) "Sensitivity, Sensibility, and Aesthetic Realism", *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 59 (1): 73-83.

Iseminger, G. (2006) "The Aesthetic State of Mind", in M. Kieran (ed.), *Contemporary Debates in Aesthetics and the Philosophy of Art*, 98-112.

Levinson, J. (2001) "Aesthetic Properties, Evaluative Force, and Differences of Sensibility", in E. Brady and J. Levinson (eds.), *Aesthetic Concepts: Essays After Sibley*, Clarendon Press, 61-80.

Prinz, J. (2014) "Seeing with Feeling", in G. Currie, M. Kieran, A. Meskin, J. Robson (eds.), *Aesthetics and the Sciences of Mind*, 143-158.